

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520004

研究課題名(和文)対話の時間性 - 「機」の諸相について -

研究課題名(英文)Temporality of Dialog

研究代表者

戸島 貴代志(Toshima, Kiyoshi)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：90270256

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：「死者との対話」や「神との対話」について、「機」に即したこれまでにない哲学的・文学的・心理学的・実証的な「対話現象学」という立脚点の獲得ができた。すぐれて実践的な場面(心理学実験も含む)にすでに織り込まれている見えない成分を、垂直性という空間性格と「機」という時間性格に基づいて取り出し、さらに対話を支える主体の「肉体」の担う働きを明確にするという点で、本研究はいわゆる「コミュニケーション論」や「応用倫理学」に対してもこれまでにない実存的対話研究の地平を開き得た。

研究成果の概要(英文)：For "dialogue with the dead" and "dialogue with God" - concerning the concept "chance" (機) - it has become to be possible to get the standpoint of psychological and empirical dialogue-research, namely, "phenomenology of dialogue". We could take out some components, which were woven into (psychological experiments including) the excellent and practical scene invisible, especially on the basis of time character of dialogue and of its space character, that is, "chance of talking" and "verticality of dialogue". The present study could obtain the open horizons of unprecedented existential dialogue research even for so-called "communication theory" and "applied ethics".

研究分野：哲学

キーワード：時間性 対話 機 垂直性

1. 研究開始当初の背景

通常の二者間での対話(つまり水平的次元)では、対話を可能にする先行的枠組みや表に現れない情報(つまり垂直的次元)が暗々裏に対話の方向、範囲、内容を制約していることが多い(例「本音と建前」「暗黙知」「場の空気」等)。対話内容には現れないそうした情報のなかには、比較的容易に見いだせる先行的枠組みを超え出た、より捉えにくく気付かれにくい高度な垂直成分も含まれる。この種の垂直成分を有する対話の存在論的条件に関して、フランス構造主義やメルロ＝ポンティ、レヴィナス、あるいは後期ハイデガーの思想などを通じた分析を試み、さらにこれに心理学的実証を踏まえて概念形成を図ったのが、平成21年度基盤研究(C)「対話の垂直性 ハイパーダイアログの包括的理解」(課題番号21520002、代表者：戸島貴代志)であった。しかしながら、この研究の過程で、そうした高度な垂直成分の発効するための重要契機として、さらに「語の出されるタイミング」という時間的要素が極めて大きな役割を果たしていることが気づかれた。たとえば、タイミングを外すと心をこめた言葉も宙に浮く、という場面を考えた場合、これまでの「垂直性」の議論だけでは追いつかないことがわかってきた。これをきっかけに、適切な機つまり好機ということに発語の発語としての成否がかかっている、ということの理解には、「垂直性」という一種の構造的・空間的範疇を超え出る時間の範疇が新たに必要である、との考えに至った。さらに、文学研究による、「機」は「気」と語義的に同根であるとの知見や、「気」を中枢とする日本独自の心性が『太平記』等の軍記物語での対話場面に読み取れるといった知見に触れる機会があり、対話研究における表現史的研究の重要性もわかってきた。以上より、機を逸し、その場その瞬間を逃したら、言葉が宙に浮くだけでなく、事も無事ではなくなる。こうした事態の探求に、心理学の視点からする感情の身体性の研究に加え、さらに文学の視点からする日本の精神性の研究も不可欠であるとの認識に至り、これらをもとに新たな哲学的対話研究を試みる、という着想を得るに至った。

2. 研究の目的

本研究では、期間3年間で、対話の高度な垂直性によって形成されるコミュニケーションの時間的成分の重要性を、「言語哲学や禅の公案を軸にした対話の哲学的研究」、「日本中世文学における気・機の使われ方に見られる日本の精神性の研究」お

よび「心理学的立場から見た対話におけるembodimentの研究」を中心に解明する。これにより、対話の「高度垂直性」が時間的成分によって深く条件づけられていることの体系的、総合的な理解にまで進みたい。「対話における時間性」を、本研究では、哲学だけではなく心理学・認知科学的な実証的側面からもサポートし、さらにこれに日本の精神性に関する文学史的・表現史的研究をも加えて、これらが相互補完的に協同できる点にまで進みたい。現実のコミュニケーションを超越した次元がむしろそのコミュニケーションの中に息づいていることを、日々の会話や日常的所作において確認すること、これまでの「対話の垂直性」の問題を「対話の時間性」に対する「対話の空間性」の問題として再構成すること、対話を全体として構成する時間的・空間的契機を哲学・文学・心理学の総合的な視点から追及すること、以上三点が期間内での目標到達点である。

3. 研究の方法

まずは全体を「哲学ポスト」と「心理学ポスト」と「文学ポスト」に分ける。その上で、哲学ポストから提示された「機」の概念による、心理学ポストにおける身体性の研究のための「状況選定」や「シナリオ作成」への影響、および、そのフィードバックとしての心理学ポストから哲学ポストへの提言、そしてこれら二者と、日本の精神性に関する文学的アプローチとの協同を試みる。各々のポスト間での「対話」として、それぞれ一年に二回のペースで懇談会、その間に小規模な中間懇談会を開催し、さらにその総括として、三ポスト間での対話、すなわち「交易post」としての協同提言を、文学ポストを軸にして図る。この交易によって、哲学における概念形成と、中世日本の文学テキスト(『太平記』、『徒然草』等)を通して見た「機・気」の表現史的理解そして心理学でのembodimentの問題を通して見た身体性と「機」の意義の相互補完的貢献を試みる。

4. 研究成果

先行的枠組みの線上に位置しながらもこれには納まらないものとして、主観と客観の中間としての「気」という概念の特徴付けがなされた。さらに、この「気」が「機」と同義であることから、高度垂直性の次元の発動する瞬間のタイミングつまり「機」の問題が「気」の問題と連動する、ということが理解された。そしてこの「気」が中世日本の精神性と深い係わりを持つことが詳細にわかることを通じて、そこから、

「機」つまり「気」を重視する対話の観念が日本独自の精神性を反映するものであることが理解された。

「機」の成分が、心理学での感情研究における実験的手法「集合法」や「個別配布・個別回収形式による質問紙調査」を用いた確率論的手法や統計学的手法で用いられる「状況選定」や「シナリオ作成」にも寄与すること、このことが確認できた。さらに、心理学における感情や身体性の研究において「機」という隠れた有効性が抉り出されることによって、結果として、従来のコミュニケーション論では不可通約的とされた異種分野間対話（たとえば科学と禅）にも、身体情報を基にした新たな通約性が見いだされ得た。

「死者との対話」や「神との対話」についても、「機」に即したこれまでにない哲学的・文学的・心理学的・実証的な「対話現象学」という新しい立脚点の獲得に見通しがついた。

すぐれて実践的な場面（心理学実験も含む）にすでに織り込まれている見えない成分を、垂直性という空間性格と「機」という時間性格に基づいて取り出し、さらに対話を支える主体の「肉体」の担う働きを明確にするという点で、本研究はいわゆる「コミュニケーション論」や「応用倫理学」に対してもこれまでにない実存的対話研究の地平を開き得た。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 7 件)

戸島貴代志「言葉の身体」、『モラリア』第 20・21 合併号、東北大学倫理学研究会、1 頁 - 33 頁、査読なし（依頼論文）2014

戸島貴代志「ふるさとの音」、『「地域」再考 - 復興の可能性を求めて』、東北大学出版会、155 頁 - 191 頁、査読無し（招待論文）2014

戸島貴代志「新しき古さ」、『日本顔学会誌』14 号、日本顔学会、21 頁 - 24 頁、2014

佐倉由泰「「顔」とは何か」、『日本顔学会誌』、第 14 巻第 1 号、2014 年 10 月、13 - 19 頁、査読なし（招待論文）。

阿部恒之 シンポジストレポート「機縁」日本顔学会ニューズレター、52 号、p.1. 査読無し（2013 年 9 月 4 日発行）

戸島貴代志「哲学入門 - 何のために生きるのか - 」、『New Wave』vol.38 No.441、全日本電設資材卸業協同組合連合会

9 頁 - 21 頁、査読無し（依頼論文）2013

戸島貴代志「己の而今」、『今を生きる 1 人間として』、東北大学出版会、137 頁 - 156

頁、査読無し（依頼論文）2013

戸島貴代志「続・活撥撥地」、『モラリア』第 19 号、東北大学倫理学研究会、1 頁 - 35 頁、査読無し（依頼論文）2012

〔学会発表〕(計 9 件)

佐倉由泰「『太平記』における「義」と「機」新田義貞の造型に着目して」、日本文学協会第 34 回研究発表大会、2014 年 7 月 12 日、いわき明星大学

佐倉由泰「『太平記』に「悪党」はいるのか」、第 18 回中世戦記研究会、2014 年 10 月 11 日、東洋大学

戸島貴代志「森一郎『死を超えるもの』書評会」（質問者）ハイデガー研究会主催、東京大学駒場、2014 年 2 月 8 日

戸島貴代志 国際シンポジウム「安全と安心のあいだ」主催：東北大学グローバル安全学トップリーダー育成プログラム、共催：東北大学文学研究科、東北大学川内萩ホール、2014 年 2 月 22 日

小形佳祐・阿部恒之 (2014). 真偽判断に及ぼす制御焦点の影響、日本感情心理学会第 22 回大会、2014 年 5 月 31 日 ~ 6 月 1 日（宇都宮大学）

戸島貴代志「新しき古さ FACE IS WHAT IS FACED」顔学会、シンポジウム「機と機縁」、東北大学萩ホール、2013 年 11 月 10 日
佐倉由泰「「顔」とは何か」、フォーラム顔学 2013（第 18 回日本顔学会大会）シンポジウム『機縁としての顔 復興の狼煙と哲学・文学・心理学』、2013 年 11 月 10 日、東北大学、招待発表。

張燕・阿部恒之 美容整形意識の日韓比較ソウルにおける面接調査 日本感情心理学会第 20 回大会（神戸大学）、2012/5/26（会期は 5/26-27）

張燕・阿部恒之 (2012). 東アジアにおける美容整形の意識の比較 東北心理学会第 66 回大会・新潟心理学会第 49 回大会合同大会（新潟大学）、2012/7/15(会期は 7/14-15)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/philosophy/teacher/index.html>

6．研究組織

(1)研究代表者

戸島 貴代志(TOSHIMA KIYOSHI)
東北大学・文学研究科・教授
研究者番号：90270256

(2)研究分担者

阿部 恒之(ABE TUNEYUKI)
東北大学・文学研究科・教授
研究者番号：60419223

(3)連携研究者

佐倉 由泰(SAKURA YOSIYASU)
東北大学・文学研究科・教授
研究者番号：70215680